

## 持続可能社会を奥能登・珠洲のキリコ祭りで学び体験するツーリズムの企画と実施

指導教員①：金沢大学地域連携推進センター 客員教授 宇野文夫

参加学生：岩井麻衣子・金裕一郎・金井美咲・高森麻衣・三浦直也・氏家寛子・  
田畑奈津子・藤澤 慶・門松怜史

指導教員②：金沢美術工芸大学造形芸術総合研究所長 教授 川本敦久

准教授 佐藤俊介

参加学生：藤井麻理・角井要平・高 陽子・佐藤佳奈・山田紗英子・青木祐子

指導教員③：国立石川工業高等専門学校トライアル研究センター次長 准教授 熊澤栄二

参加学生：四方 葵・佐々木理紗

### 1. 調査研究成果要約

奥能登のキリコ祭りを従来の見物を中心とした観光ツアーではなく、学ぶこと、すなわちスタディ・ツアーとして成立させるための調査研究として、実際に3泊4日のツアー（09年9月14日～17日）を旅行会社の協力で商品化し、全国から6人のシニアの参加を得て実施した。学びのファクターである文化・歴史では国立石川工業高等専門学校、キリコ絵を中心とした芸術の面で金沢美術工芸大学との連携を図ることができた。

### 2. 調査研究の目的

珠洲市からの2つの課題提案（09年度課題番号28, 29）に応えるための調査研究である。一つは、奥能登の伝統文化であるキリコ祭り＝写真＝など祭礼（ほか獅子舞、きゃらげ、早船狂言、奴振り、の



ぼり旗、神輿巡行など）の各地の言い伝えや個々のまつりの趣旨、神社との関係を総括的に体系化し、文化遺産としての価値を高めること。二つめは、高齢化社会を迎え、金銭的に余裕があり、目の肥えた「元気なシニア世代」をターゲットにした、魅力的な旅行商品の開発と商品化を提案してほしいとの内容である。この2つの提案を考え合わせ、以下の取り組みとした。日本の「3大灯り祭り」といわれる「秋田の竿灯」「青森のねぶた」「能登のキリコ」だが、キリコ祭りは集落単位での祭礼であるためスケール感に乏しく、全国的には「知られざる」文化遺産である。しかし、実際にその土地を訪ねてキリコ祭りを目の当たりにすると、古来から継承された味わい深い日本の文化であることに気づかされる。「出し物」であるキリコや獅子舞にはその土地ごとに文化的ストーリーがあり、地域コミュニティを構成する人たちの「熱」を感じる。各家庭でのヨバレゴッツォなど「もてなし」の文化も奥深い。その祭りには「日本の里」の原点と魅力が詰まっている。こうした奥能登の祭りこそ、シニア世代に響く旅行商品であり、地域資源であると考えられる。幸い今回は、キリコ絵の制作という芸術性を帯びたテーマもツアーの中に織り込むことが可能となった。シニア世代が満足させたいものは「学びのニーズ」である。単に観光で奥能登の祭りを見物するのではなく、文化や芸術として学ぶ「ツーリズム」として創り上げることを目的とした。

### 3. 調査研究の内容

本調査研究は、金沢大学が代表機関となり、金沢美術工芸大学と国立石川工業高等専門学校の連携機

関と協働で実施した。その役割は以下の通り。

### プロジェクト1) 金沢大学・・・スタディ・ツアーの実施と番組づくり



金沢大学は地域連携推進センターが窓口となり、スタディ・ツアー「金沢大学 能登4日学びの旅」(別紙・旅行企画書)を日本旅行の関連会社「日旅九州エンタプライズ」(福岡市)ならびに関西のシニア向け新聞「フロンティアエイジ」(大阪市)の協力を得て企画し、ツアーの参加者を募集した。企画書は生涯学習の一環として社会人の学びのニーズに応え、さらに地域の学習資源の発掘を行う内容。旅行費用は1人8万8千円で、全国から6人の参加応募が

「金沢大学 能登4日学びの旅」参加者リスト					
	名前	年齢	性別	郵便番号	住所 ※丁目・地番は略
1	斉藤 敏彦	62	男	121-0075	東京都足立区一ツ家
2	杉山 太郎	73	男	560-0082	大阪府豊中市新千里町
3	安井 正弘	73	男	617-0005	京都府向日市向日町喜多山
4	吉田 洋	54	男	924-0811	石川県白山市長町
5	綱菱 英明	60	男	814-0005	福岡県福岡市早良区祖原
6	古堅 郁子	69	女	630-0213	奈良県生駒市東生駒

あった。09年9月14日から17日の3泊4日でツアーを実施した。金沢大学で放送を研究する自主ゼミ「web-KURS」の学生9人がこのツアーを

中心に金沢美大ならびに石川高専の動きを撮影し、30分番組に編集する(10年1月完成)。この番組はケーブルテレビ会社「能越ケーブルネット」の珠洲エリアで放送予定(同年2月)である。

スタディ・ツアーの実施概要は以下。

9月14日(1日目) 金沢市内の老舗料亭「つば甚」で昼食を兼ねたレセプションが開かれ、金沢の菓子屋の諸江吉太郎氏が「金沢でも珍

しい菓子懐石」をテーマに講義。その後、バスで珠洲市の古民家レス



トラン「典座(てんぞ)」で祭り料理=写真・右=を味わった。最初の30分間は、広間の囲炉裏端でキリコ絵を描き続ける成之坊良輔氏(元珠洲市教育長)の講義。能登各地のキリコ絵の特色や見分け方のほか、夜の行灯のチラチラする灯りにも映えることを計算に入れて描くコツなどの説明があった。

9月15日(2日目) 午前にはツアーの目玉授業の一つである「寺家のキリコ絵づくり」の制作過程を見学した。この日は、地元から依頼を受けた金沢美術工芸大学よる初めての原案提示があった。新調するキリコ絵について、大学側と地元住民とがそれぞれ思いを込めて、より芸術性の高いもの、存在感があるものと真剣な眼差しで議論が交わされた。午後は、藤平朝雄氏(作家)を講師に迎え、奥能登地域にある「平家落人の里」を中心に巡り

9月14日(月) 金沢～珠洲  (珠洲ビーチホテル泊)	13:00 JR金沢駅・西口広場前に集合。係員がお待ちします。  13:30～15:00 アクティビティ ◎菓子懐石を楽しむ 講師:和菓子「諸江屋」会長 諸江吉太郎 金沢の和菓子界の重鎮である諸江吉太郎氏による『菓子懐石』復刻版を当地最古の老舗料亭「つば甚」で楽しみ、和菓子から見える金沢文化を考える。  金沢～珠洲へ移動 15:30～18:00 (めだか交通のマイクロバス利用)  18:00～古民家レストラン「典座」にて、「能登の祭り」とキリコ絵の講義を聞き、「能登の祭り料理を味わう」講師:成之坊良輔氏(元珠洲市教育長)その後、ホテルにチェックイン。	
9月15日(火)  (珠洲ビーチホテル泊)	講義 9:00～11:30 珠洲市寺家地区を訪ねる ◎寺家のキリコ絵をつくる 講師:金沢美術工芸大学教授 キリコに描かれた絵、金沢美大の学生たちがその制作に携わっている。キリコの絵柄を解説。その絵に込められた能登のある種のスタイルを読み解く。  フィールドトリップ① 13:00～17:30(専用バス) ◎能登を広く歩き、深く知る① 講師:作家 藤平朝雄 「平家にあらずんば人にあらず」と権勢を持った平時忠の墓(珠洲市)などを訪ねて歴史を紐解く。「能登はやさしや土までも」と称される「たおやか」な能登の風土を考察する。  市内料理屋で夕食後、正殿(しょういん)秋祭りを楽しむ 奇抜な格好をした若者たちの「奴振り」が見もの。地元のご好意でキリコ担ぎの体験を予定。	
9月16日(水)  (珠洲ビーチホテル泊)	講義 9:00～11:30 能登学会にて ◎キリコ祭から考察する持続可能な社会 講師:石川高専 熊澤栄二教授 能登の祭礼に欠かせない「キリコ」。能登のキリコは高さ16ftにも及び、ある意味で「進化」を遂げた。能登の人たちの願いや思いが凝縮されたキリコを通して、能登の持続可能な人間社会を考察する。  フィールドトリップ② 13:00～17:30(専用バス) ◎能登を広く歩き、深く知る② 講師:金沢大学客員教授 宇野文夫 稲刈りの輪扁・金蔵地区を訪ねる。日本史が凝縮されたような村の歴史と生き様を考察。さらに、金蔵から見ていくリアルな日本の地方を考える。  最後の晩は市内料理店で打ち上げです(実費負担)。そのあと、柳田のキリコ祭り見学を予定。	
9月17日(木)  珠洲～金沢	9:30～15:00 (大学の車を利用) 能登～金沢駅 能登学会で修了式と記念植樹。 その後、築100年余りの古民家レストラン「典座」へ。早めのおおはれ昼食会では、この4日間を振り返り意見交換をします。  昼食後、金沢駅へ。 「フィールドトリップ特別編」を楽しみながら金沢へ。 (金沢駅 15時頃解散)	

ながら、能登の歴史と風土と、その豊かさについて学んだ。奴振り（やっこぶり）が見ものの「正院秋祭り」を昼と夜の行程に加え、夕方には珠洲市鶴飼や能登町松波の秋祭りにも立ち寄った。いずれの祭りも、地域の住民、老若男女がこぞって集う、気取りのない祭りで、参加者も「地域の和」に溶け込み、祭りの醍醐味を味わった。

**9月16日(3日目)** 午前は、奥能登でもキリコの原型を最もよく残しているといわれる白木のキリコが舞う柳田・白山神社に赴いた。同神社に隣接する安養寺を会場に、地域課題ゼミ分担者の熊澤栄二・石川高専准教授が講義した。山と海をつないだ「須々神社の空間構造」に関する推論を展開した上で、奥能登の里山と里海の連続性が解説された。午後は、「日本の里100百選」に選定された輪島市金蔵集落の慶願寺で昼食をとった。豆類を中心とした素朴な精進料理「ほんこ（報恩講）料理」を味わった。その後、ヒイラギの木が市の文化財にも指定されている井池光夫家に会場を移し、井池氏（金沢大学里山駐村研究員）による金蔵集落および能登全般を理解するための総括的な講義があった。時節柄、金蔵集落は秋の収穫の最中で、黄金色に輝く田んぼを中心とした集落景観を参加者たちはそれぞれの目と記憶に焼きつけたようだった。その夜は白山神社に戻り、ツアー参加者もキリコを担ぎ、また地域の人といっしょに太鼓を打ち鳴らし＝写真・上＝、祭りの粋を堪能した。



**9月17日(最終日)** 金沢大学の能登学舎（珠洲市）に集合し、修了式に臨んだ。ツバキの木を6人全員で記念植樹した。その後、ツアーに参加しての意見発表会を行った。

## プロジェクト2) 金沢美大・・・日本一大きいキリコの絵を制作

金沢美術工芸大学はキリコ絵の制作を手がけ、現在進行形である。制作にいたった経緯を説明する。09年春、珠洲市寺家町の祭礼の責任者から「9月14日の祭礼に使うキリコ（高さ16尺）の絵を描いてくれる人を紹介してほしい」との依頼が金沢大学地域連携推進センターに持ち込まれた。このキリコは能登で最大（つまり日本一）のもの。キリコ絵はこれまで地域の絵師が描いてきたが、高齢のため体調



不良で今回描くことができなくなった。そこで、金沢美大の久世建二学長、川本敦久教授（地域連携担当）に現地の事情を説明し、キリコ絵の制作について協力を得ることになった。6月15日に寺家地区の祭礼責任者が金沢美大を訪ね、キリコ絵の現状を説明し、制作を依頼した。また、7月21日には金沢美大の川本教授と佐藤俊介准教授が現地を訪れ、珠洲市寺家町の須々神社境内に格納されている同町塩津上野地区のキリコとその絵を視察した。キリコ絵のモチーフは古くから決まっており、獅子に乗った観音様の絵である。

モチーフの由来となった伝承を聞いた後、佐藤准教授が中心となって図案の作成が始まった。

9月15日、塩津上野地区の集会所で、住民に対して図案が提示された＝写真・下＝。提出された2枚の絵。美大側のアイデアで、これまでの観音様に代わり女神が絵の中心に据わった。寺家地区に伝わる「しし岩」伝説をもとに獅子に乗って海を渡る女神の姿が描かれた絵で、色合いも従来のイメージを脱したものだった。伝統の図柄をそのまま受け継ぐのではなく、時代を反映した新しい伝統に変えていく、



現在のキリコ絵

金沢美大の図案



そのような美大側の思いが込められていた。これに対し、従来のキリコ絵に思い入れを持つ住民からは要望や意見が相次ぎ、この日は話がまとまらなかった。地元のコンセンサスを得ながら、現代性や斬新さを打ち出していくことの難しさが垣間見えた。このキリコ絵をめぐる美大側と住民のやり取りをスタディ・ツアーの一行6人も見守った。

その後、話し合いは重ねられ、10月29日に寺家地区の代表が地域の要望を再度まとめて美大側に説明。12月24日には美

大側から図案の修正提案があった＝写真・上＝。今後の制作スケジュールについては3月下旬から4月頭にかけて、金沢美大で修士の学生が中心となって制作に入る。9月12日の寺家のキリコ祭りには一般にもお披露目されることになる。

### プロジェクト3) 石川高専・・・祭礼調査とキリコ囃子フォーラムを開催

石川高専は熊澤栄二准教授の建築景観ゼミが中心となって、珠洲市の祭礼調査を行った。今年度の調査は▽9月12・13日 三崎町寺家地区▽9月16・17日 三崎町小泊地区▽9月18・19日 三崎町引砂/高波地区▽9月21・22日 三崎町伏見地区▽9月22・23日 狼煙町▽9月25・26日 野々江町▽10月3・4日 川浦町▽10月13・14日 馬縵町一の8つの地区で行った。祭礼調査は、地域の特徴を探るために、祭礼の流れ・祭礼所作・出



し物の概要を主に調査した。また、今回のスタディ・ツアーでは、9月16日に熊澤准教

授によるレクチャーが行われ、古の能登人の祈りや生業（なりわい）から「須々神社の空間構造」を推論し、祭祀の風景を描き出すという手法が紹介された。

12月20日、石川高専は珠洲市などと共催し「奥能登キリコ囃子フォーラム」を開催。平成21年度祭礼調査8地区を基とし、継続研究を含めて計13地区の祭礼パネルを制作し会場で展示した＝写真・左下＝。また、

来場者のうち100人程度からヒアリングを行い、10地区の祭礼の現状を調査した。奥能登は過疎化が進み、地域によっては祭りの継続が危ぶまれるところもあり、今後、伝統的な文化遺産が死蔵される可能性がある。このような問題意識からキリコ祭りを中心とした能登の祭礼調査を継続していく。

## 4. 調査研究の成果

スタディ・ツアー「金沢大学 能登4日学びの旅」では、シニア世代の6人の参加を得た。ツアー後のヒアリング調査では、参加者からはおおむね好評を得たが、内容を重視する余り、スケジュールが過密になり、体に負担がかかったとの声も聞かれた。今回、石川県白山市からツアーに参加した吉田洋



氏（街づくりプランナー，54歳）の意見を以下紹介する。

【体験・成果として】

- ① 「キリコ祭り」を中心教材として，金沢の武家文化，須々神社立地の由来や平家伝説，金蔵集落の美しい里山景観，豊かな食材など，かけがえのない能登での文化体験が出来たこと。
- ② キリコ祭りは，灯りのイベントでもあり，夜が最も盛り上がる。そうした祭りの最も見頃の時間帯（特に「柳田・白山神社」）を設定していただいた。
- ③ 結果的に少人数編成でのツアーとなったことで，統一行動が図りやすく，また集合時間の設定などでも，小回りの利くきめ細かな対応が実現できた。

【改善点として】

- ① 夜の祭り見学が多くなった関係から，宿舎への帰着がいつも遅く，宿泊施設で ゆったり過ごす時間を味わえなかった。
- ② 「祭りの見どころの時間帯を組み込んだ行程」の関係で，同じ道を往復することが多くなり，移動効率でも時間的にも，無駄な場面が発生した。参加費がやや高かった面もあってか，参加者が一ヶ台台となった。望ましくはバスの座席の半分以上が埋まる程度の参加者がいた方が参加者各々にとってもより充実したのでは，と感じた。

## 5. 調査研究に基づく提言

シニア世代を満足させるツーリズムの開発。そのコンテンツの中心に奥能登のキリコ祭りを据えて，文化と歴史，そして人の味わい，食の喜びを感じ取ってもらえる旅行企画として工夫した。福岡市からの参加した旅行業，鈿菱英明氏（60歳）の提言を交え，キリコ祭り，あるいは能登観光を底上げするために以下提言したい。

- 着地型 ・能登半島は路線バスの利用となるので，地域を歩く着地型メニューを中心とした旅行商品を検討したほうがよい。
- 案内人 ・金沢市を歩く着地型旅行のような，個々のメニューを訪問者に楽しんでもらう案内人「ランドペレーター」機能を観光協会に置く。能登体験ガイドが仕事として成立するように人材を養成する。
- セット化 ・塩作りやきのこ狩り体験ツアーのほか，里山や里海をフィールドにした家族向け，小中学生向けの自然や環境を学ぶ1泊2日のエコツアーとセットにできないか。
- P R ・通常の旅行商品としてキリコ祭りをPRするには，よほど知名度を上げないと集客は難しいが，「能登半島まつりの旅」のように，本来能登が持っているブランド力を全面に立てる。

これとは別途に，現在，シニアの学びのニーズに応える大学連合「シニア大学ネット（仮称）」が日本旅行OBらによってプランづくりが進んでいる。こうしたターゲット・マーケティングの動きに，行政やNPOがオブザーバーとして参加しても無理はない。また，1960年代の能登半島の観光ブームのときに青春を過ごした年代がいまシニア世代であり，能登は「記憶の潜在」として知名度は高い。

石川高専は，学術調査をベースとした能登の観光産業の支援を提言している。「バーチャル・キリコ会館」（仮称）のサイトを立ち上げ，祭り囃子のリズムや，迫力あるキリコの映像で祭りを疑似体験

してもらい、誘客につなげようという試みである。

## 6. 調査研究の自己評価

本調査では、キリコ祭りをテーマにスタディ・ツアーの企画実施、キリコ絵の制作、祭礼調査とフォーラムの開催と随分と欲張った内容となった。ツアーの実施を通じて地元の祭りに対する愛着の強さ、その祭りへの愛着が連綿と続く「持続可能な社会」能登の精神的な支柱となっていることをツアーの参加者を始め、企画に携わった学生も実感したことだ。キリコ絵の制作では地元のキリコに対するこだわりを考慮に入れて、コンセンサスを重視して時間をかけた。時間がかかったがゆえに、本格的な制作は次年度になだれ込むことになった。このキリコ絵をめぐる一連の流れは現在、金沢大学で報告書を兼ねたビデオドキュメンタリーとして撮影しており、許されれば、地域課題ゼミナールに再度チャレンジして、キリコ絵の完成、6月の組み立て、そして秋祭りの本番まで撮影して、ビデオ作品の完成度を高めたい。